Book Reviews

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Saitoh, Nobuo, Suzuki, Mitsuo, Furuike, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00056055

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

引用文献

HIRAOKA, A., YOSHITAMA, K., HINE, T. and TATEOKA, T. (in prep.). Capillary-isotachophoresis of flavonoids and its application to detection of rutin in the extracts from *Calamagrostis* (Poaceae) species.

MAEDA, M., HIRAOKA, A., TATEOKA, T. N. and TATEOKA, T. 1984. Detection of rutin by high-performance liquid chromatography and its application to taxonomic studies of *Calamagrostis* (Poaceae). Bot. Mag. Tokyo **97**: 271-274.

TATEOKA, T. 1977. Chromosome numbers of the genus *Calamagrostis* in Japan. Bot. Mag. Tokyo **89**: 99-114.

———. 1978. Natural hybridization in Japanese *Calamagrostis* III. The origin and present status of *Calamagrostis longiseta* var. *longe-aristata*. Bot. Mag. Tokyo **91**: 141-171.

館岡亜緒. 1982. ヤクシマノガリヤス(イネ科)について. 植物分類地理 **33**: 346-354.

———. 1983. 植物の種分化と分類, 養賢堂, 東京.

———. 1984. *Calamagrostis hakonensis* (Poaceae): distribution and differentiation of cytotypes. Bot. Mag. Tokyo **97**: 247-270.

———. 1985a. Evolutionary differentiation in the genus *Calamagrostis* (Poaceae) in Japan. In H. HARA, ed., Origin and Evolution of Diversity in Plants and Plant Communities, Academia Sci. Book Inc., Tokyo, pp. 208-219.

———. 1985b. A taxonomic study of the *Calamagrostis tashiroi* group (Poaceae). Bot. Mag. Tokyo **98**: 181-191.

———., HIRAOKA, A. and TATEOKA, T. N. 1977. Natural hybridization in Japanese *Calamagrostis* II. *Calamagrostis langsdorffii* × *C. sachalinensis*, an example of an agamic complex. Bot. Mag. Tokyo **90**: 193-209.

———. and TATEOKA, T. N. 1981. Attributes of *Calamagrostis langsdorffii, C. sachalinensis* and their intermediates in Shikoku. Bot. Mag. Tokyo **94**: 355-369.

Summary

1. The presence of rutin (Quercetin 3-rutinoside) was surveyed in leaf blades of tetraploid (2n=28, semidiploid) taxa of Japanese *Calamagrostis* (Table 1). The examination was carried out on the basis of the voucher collections whose chromosome numbers are known, except for a few collections of *Calamagrostis adpressi-ramea* and *C. onibitoana*. Rutin was invariably detected in populations of six species, while throughout undetected in those of the other eight species. The usefulness of detection of rutin for the analysis of hybridizing populations between the species with rutin and those without rutin was discussed: *Calamagrostis longiseta* var. *langiseta* (rutin−) × *C. fauriei* (rutin+), and *C. adpressi-ramea* (rutin−) × *C. onibitoana* (rutin+).

2. The presence of rutin was examined for 17 polyploid populations, as well as three tetraploid (=semidiploid) populations, of *Calamagrostis hakonensis*, a highly polytypic species which represents an agamic complex by itself (Table 2). Rutin was undetected in the tetraploid and most of the polyploid populations, but detected in a few polyploid populations. The establishment of the latter populations through hybridization with the species having rutin was suggested.

(Received Jul. 4, 1986)

○ 大塚孝一著　**長野県のシダ植物**　信毎書籍出版センター, 昭和62年3月3日発行。B5判, 157頁+口絵(カラー) 4頁。定価3,500円 (〒300円)。申込先大塚孝一宛 (振替口座　長野5-27118)。

本書は全6章からなり, 特に第3章では長野県に分布する種類を明らかにし, 第6章では主な30地域に産する種類を紹介している。その数は種, 変種, 品種, 雑種を加えて300を越すが, その内の約220種については標本写真が掲載されている。

○ 竹田孝雄著　**広島県のシダ植物**　博新館 (〒733 広島市西区南観音7-7-1, 振替口座　広島8-9301), 昭和62年1月30日発行。B5判, 560頁。定価10,000円。

本書の主体は広島県内で確認できたシダ植物, 種・変種・雑種・品種の計300の内, その240の標本写真と分布図, ならびに証拠標本をあげている。(里見信生)

個体の萌芽が確認された。これらの各個体の生育期間は45から58日間で，平均生育期間は53.0日間であった。第2週目には31個体（有花個体1個体）が萌芽し，生育期間が45から53日間で，平均生育期間が47.4日間であった。第3週目は40個体（有花個体9個体）が萌芽し生育期間39から46日間で，平均生育期間が43.7日間であった。萌芽期間の最後の週では，41個体（有花個体19個体）が萌芽し，生育期間が32から39日間で，平均生育期間が38.5日間であった。1982年では，萌芽期間が前年より2週間長かったが，各個体の生育期間は同様の傾向を示し，平均生育期間は第1週から第6週まで，67.0，56.5，44.6，42.8，35.6，31.8日間と短かくなった。このように群落を構成する個体の生育期間は，おそく萌芽した個体ほどその生育期間が短かくなる傾向を示した。特に，有花個体は無花個体よりおそく萌芽し，生育期間が短かくなる傾向を示した。

以上のように，カタクリの生育期間は短かく，また，萌芽時期により生育期間に大きな差がでることが明らかになった。しかし，開花状況をみると，毎年ほぼ同数の開花数がみられ，なかでも40日と短い生育期間の有花個体が翌年も開花することが観察された。このことはカタクリが短かい生育期間にもかかわらず，早春の落葉樹林の林床という環境に適応し，種の維持のための効率のよいエネルギー生産をしていることを意味すると思われる。

(Received Nov. 9, 1986)

○ **フナシホタルブクロ（新品種）**（米澤信道）Nobumichi YONEZAWA: A New Form of *Campanula punctata* LAM.

ホタルブクロの花冠は，内側に紅紫色の斑点が多少ともあるが，筆者は1985年7月，福井県の景勝地三国海岸で，白花で斑点の全くないものを発見した。



フナシホタルブクロ
（1986年6月27日自宅植栽中のものを撮影）

ホタルブクロは，花色，葉形，毛の多少など変異に富むことが知られているが，三国海岸一帯に分布するホタルブクロは，白花ばかりで，萼や茎葉に毛が少なく，広葉の傾向が強く，とくに，葉の表面は無毛で光沢が著しい。本品種は，これらの集団の中で発見した一型である。写真は，持ち帰り自宅で植栽したものが今年開花したもので，斑点の有無は遺伝的であることが確認できた。なお，本品種を含め，三国海岸一帯のホタルブクロは，多くの個体で茎に虫瘿を持つのがめだったことを付記しておく。

最後に，本品種の採取に際して，成安女子高校の野村健治先生に同行，協力頂いており，深く感謝の意を表します。

Campanula punctata LAM. form. **impunctata** YONEZAWA, form. nov.

Corollae albae impunctatae.

Nom. Jap. Funashi-hotaru-bukuro (nov.)

Hab. Honshu. Pref. Fukui: Mikunikaigan, Mikuni-machi, Sakai-gun, alt. ca. 3m (N. YONEZAWA; July 7, 1985; Holotype in KANA no. 117390).

（〒606 京都市左京区上高野大塚町2-16, Kami-takano-otsukamachi 2-16, Kyoto-shi, Kyoto Prefecture 606） (Received Jun. 12, 1986)

○ **谷口森俊　三重県の海藻相**（三重県の植物相その1）　自己出版。昭和62年発行。B5版，33頁。領価500円（送料170円を含めて）。内容は三重県全沿岸の海藻群落の分布，組成，分類，季節的消長，目録，文献である。入手御希望の方は谷口森俊氏（〒514-11　久居市鳥木町413-2，振替口座名古屋2-56390）に申しこまれると送本される。（里見信生）

位性をもたないことが指摘されている。特にため池のように構成種の少ない群落では，研究の目的に応じて融通性をもったアプローチが必要であろう。

本報では，ため池の水生植物群落は通常，少数の種によって優占されている現実に着目し，兵庫県東播磨地方のため池449個の水生植物群落を，優占種あるいは優占種の組み合わせによって類型化することを試みた。その結果，次の21型を認めることができた。（ ）内にはため池数を示す。 1．ハス型(13)，2．ハスーヒシ型(20)，3．ハスーサンショウモ型(3)，4．ヒシ型(198；共存種の生育型によって4つの亜型に細分)，5．ヒシーオニバス型(15)，6．ヒシーガガブタ型(32)，7．ガガブタ型(21)，8．ガガブタージュンサイ型(8)，9．ジュンサイ型(37)，10．ジュンサイ—ヒツジグサ型(6)，11．ヒツジグサ型(12)，12．ヒツジグサ—フトヒルムシロ型(3)，13．ヒメコウホネ型(8)，14．ヒルムシロ型(12)，15．ホソバミズヒキモ型(6)，16．コカナダモ型(10)，17．タチモ型(8)，18．クロモ型(4)，19．ウキクサ型(3)，20．サンショウモ型(3)，21．ホテイアオイ型(3)，22．その他(24)。

優占種による類型化は繁雑な操作を必要としないきわめて簡単な方法であり，群落を相観的に把握できるという特徴をもつ。特定地域の水生植物群落の概略を知るためには，このような簡単な方法の意義も小さくないと考えている。ここで示された群落型と植物社会学上の植生単位との相互関係は，今後の検討課題である。

(Received June 20, 1986)

○ **植生史研究** 第1号。植生史研究会。1986年8月18日発行。B5判，68頁。年1冊発行。研究会年会費2000円（研究会に入会しなくとも雑誌の頒布は受けられる。第1号は2000円）入会申し込み，雑誌の頒布希望は植生史研究会事務局（〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部生物学教室内，TEL 06-605-2583)。

日本生態学会の大会の際に開かれていた自由集会に，植生史談話会があった。植生史研究会はこの談話会が昨年の春の京都大会の時に発展独立したもので，そのいきさつを研究会代表の辻誠一郎氏が冒頭にある「植生史研究第1号を発行するにあたって」の中で簡単に触れている。氏は独立の理由に自由集会の限られた場所と時間の制約からはなれて定期的に植生史に関する突っ込んだ話のできる会を持ちたい，自由集会で話された内容をきちんとした形で残したい，という参加者の希望が強かったことを挙げている。そこで研究会の活動として，生態学会時の自由集会の他にシンポジウムを行うこと（昨年は秋に大阪市立大学の私市植物園で「植物化石群集の形成過程とその性格をめぐって」のテーマのもとに1泊2日で行われている)，「植生史研究」を年1冊発行すること，がうたわれている。

昨年夏に発行された植生史研究第1号には次の様な論文が収録されている。日本の第四紀植生史研究の諸問題（辻誠一郎)，第四紀大型植物化石研究の課題と問題点（南木睦彦)，陸生珪藻による古環境の解析とその意義——わが国への導入とその展望(小杉正人)，スギとアケボノスギの花粉形態——その研究の歴史(相馬寛吉)，近畿地方のスギの変遷（高原光・竹岡政治；要旨）と5編の論文の他，書評と雑録がついている。この5編のうちあとの2編は春の生態学会の自由集会の記録であるが，前の3編は植生史研究における総説である。辻氏のそれは花粉分析，南木氏のは大型植物遺体，小杉氏のは珪藻化石を中心としたもので，各々の研究の現状，問題点，将来の問題が論じられている。

現在の植生を捉えるのは現地調査を通して可能であるが，過去の植生，即ち古植生を復原するのは容易でない。植生が存在していたことの直接的な証拠は植物化石であるが，この植物化石とて生えている木がそのまま化石になっているわけではなく，葉や花，花粉，果実，種子，枝，木材として各部分がバラバラになっている。これらの小さな部分から植物の種を同定するわけだが，そこには同定に関するたくさんの問題がある。同定が済んだとするとそれから植生を復原するわけだが，そこには化石を含んだ地層の堆積物の性質，堆積環境，古地形などが絡んでくる。さらに第四紀の後半，完新世では人間の人文活動が盛んになり，植生に対する人間の影響も無視できなくなる。この様に古植生の変遷を明らかにするには植物化石をたんに同定すれば良いのではなく，そこをベースにして自然科学，人文科学のいろいろな分野の共同した研究が必要になる。その意味でこの研究会は古植生復原のおおもととなる化石の同定の問題から始まって，他分野との共通理解を深め，基礎資料が曖昧なままとかく結果だけがセンセーショナルに喧伝される事の多い第四紀における植生の変遷をより具体的に明らかにしていこうとしている。そのこともあってこの雑誌は原著論文集ではなく総説誌を目指していることが，和文で書かれていること，引用文献がきちんと挙げられていることから分かる。 (鈴木三男)

Summary

The floristic composition and vegetation units of the beech forest of the Shirakami mountain region, stretching over both Aomori and Akita Prefectures, were investigated with the method of the ZM school. The author recognized this forest as Lindero membranaceae-Fagetum crenatae. This association could be distinguished into the following three subassociations and two variants.

A : Subassociation of *Dryopteris crassirhizoma*

B : Typical subassociation

C : Subassociation of *Hamamelis japonica* var. *obtusata*

C－1 Typical variant

C－2 Variant of *Shortia uniflora*

The floristic composition of the beech forest of the Shirakami mountain region was found to lie between that of the forest in the area of its northern limit (Hokkaido, Tsugaru and Shimokita Peninsulas) and that of the Japan-Sea side.

(Received Oct. 3, 1986)

○ **蟹本信雄先生の御逝去を悼む**（渡辺定路） Sadamichi WATANABE : Obituary of the Late Mr. Nobuo KANIMOTO

蟹本信雄先生は 1986 年 10 月 22 日病気のためお亡くなりになりました。先生は 1952 年，本会発足と同時に御入会になった草分けの貴重なおひとりで，ここに会員の方々とともに謹んで御冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

先生は大正 7 年福井市松本に生誕。小学校時代に父君を失なわれ大変な苦労の後，昭和 15 年 3 月に広島高等師範学校を御卒業，岩手県立盛岡中学校に奉職されましたが，同年 12 月 1 日に召集，北支に派遣，中国に在ること 5 年 3ヶ月，昭和 21 年 3 月 27 日に御帰還，4 月から盛岡中学校に復職，12 月に母校の福井中学校に戻られました。その後，昭和 23 年 4 月から 30 年 3 月まで大野高等学校に在勤，大野高校時代は生物部の生徒を連れて奥越の羊歯植物をよく採集，また生物受講生には夏休みに羊歯植物 50 種以上の採集を課し，福井県東部の羊歯相の解明に努力されました。その成果として北陸の植物第 2 巻第 2 号（1953 年）に「越前山岳地帯の羊歯相（要約）」，第 2 巻第 3 号に「越前山岳地帯の羊歯相（附表）」を発表，また福井県博物同好会会報第 2 号（1955 年）に「越前山岳地帯の羊歯相」「越前東部地区羊歯植物目録」を，第 3 号（1956 年）に「福井県東部地区に於ける羊歯植物の分布について」，第 5 号（1958 年）に「福井県内羊歯に関する二三の知見」などの文献となっています。これらの研究によりホソバコケシノブ，オオメシダ等 10 数種が福井県のフロラに追加され，福井県の戦後の羊歯相の解明はここに始ったと言えます。

その後，昭和 41 年 8 月には日本生物教育大会福井大会の実行委員長として活躍され，42 年 10 月に教育庁指導課長を，50 年 4 月より福井県高等学校校長会長を歴任，52 年 11 月には文部大臣表彰を受けられ，54 年 3 月に 39 年間の教職を退かれました。退職後は仁愛女子短期大学に於て自然関係を担当され，また植物採集も続けられ，筆者らと植物同好会を結成，常に若者の先頭に立って山野を跋渉して，植物研究に燃された情熱，態度は後輩の指標となり，その活気に満ちたお姿は今も鮮やかに甦り哀惜の念ひとしおであります。ここに先生の輝しい業績を偲び，心からご冥福をお祈り申し上げます。

LOIS A. ABBOTT, FRANK A. BISBY, and DAVID J. ROGERS. 1985. Taxonomic Analysis in Biology, Computers, Models, and Databases. 336pp. Columbia University Press, New York.

コンピューターが分類学に大きな影響をあたえるに違いない，という予想はだれもが抱くところであるが，事実に即してそれがどのようなものであるかを全体として紹介した著作は少ない。これは，その数少ないものの一つであって著者らの立場は「分類学におけるコンピューターの応用によって得られる利益が最も大きくなるのは，新しい方法が幾世紀にもわたって分類学の働き手が発展させてきた実際の方法に付け加えられる場合だけである。とって代るのではない。」という言葉に要約されると思われる。内容は第 1 部標準的な分類学，第 2 部分類学的な仕事の理論的基礎，第 3 部コンピューター支援の分類学的分析，第 4 部コンピューター支援のデータ・ベース・マネージメントの 4 つの部分にわかれている。第 13 章将来の到達点で結びとなっているが，この部分を含めて全体として着実な労作となっている。マニュアルとしては期待はずれとなると思われるが，特にコンピューターの操作の実際に詳しくない学生，教師にとっても興味深く読めるものと考えられ，御一読をお薦めしたい。（古池 博）

○ **故薄井　宏先生を偲ぶ**（福嶋　司）Tsukasa HUKUSIMA : Obituary of the Late Dr. Hiroshi USUI

昭和62年2月4日，宇都宮大学教授，薄井　宏博士が帰らぬ人となった。昨年9月の神戸大学の中西　哲博士に続く訃報で群落生態学を志ざす者はまたしてもかけがえのない人を失なってしまった。ここで，先生の生前歩まれた跡をたどり，若干のエピソードを紹介しご冥福をお祈りしたいと思う。先生は大正13年3月14日に台湾でお生まれになり，昭和20年宇都宮農林専門学校を卒業後，昭和25年より宇都宮大学農学部林学科に勤務され，亡くなるまでの37年間後輩の指導と研究に従事された。先生は昭和30年に日本生態学会誌に発表された「湯西川北部流域の森林植生」を始め，30年代には北関東の冷温帯を中心に多くの業績を発表され，当時，発展途上にあった我国の植物社会学の進展に尽された。また，我国の植生の代表的な優占種であるササの生態と分類の研究は先生のライフワークと言えるもので，昭和36年に「ササ型林床優占種の植物社会的研究」で京都大学から農学博士の学位を得ておられる。その後，「葉分析による植生の研究Ⅰ」(1979) をはじめとする一連の研究に示されているように植物群落構成種のもつ栄養塩類量に着目した研究を展開され，植物社会の成立に果す栄養塩類の働きについての研究を進めておられた。志し半ばにして他界されたことは本人も不満足であったと推察される。10年も前になるであろうか，学会の折，筑波大学で倒れ，かなりの期間死線をさまよわれた。それもテニスで鍛えた体力で克服され，無理のきかない躰に鞭打ちながら講義や実習を行なっておられたと聞いている。先生は楽器を奏で，書を得意とした。また，宇都宮大学の校歌の作詩は先生の手になるものであるが，生前，「他大学の校歌の詩を解析し，何日も徹夜で完成した」と誇らしげに話されたことが思い出される。このように先生はロマンチストでもあった。葬儀の時，大学の校歌が流れる中，先生の親しい友人の方から「今年1月，自分に許された残りの時間が少ないことを悟った先生から，『今後どんな生き方をすればいいのか，どんな本を読めばいいのか，私にはもう時間がないんです』と電話で切々と話された」と聞いた。正義感が強く，真面目に生きてこられた先生の人柄が思われて涙した。今は奥様のご実家である宇都宮市内の桂林寺で静かに休んでおられる。お子様のいなかった先生はいつも大切にしておられた奥様と今でもお話しになっているのではないだろうか。奥様に甘えた一面もあった先生のことだから，心から先生のご冥福をお祈り申し上げる。

○ **丸尾源治先生を悼む**（政谷徳治）Tokuji MASAYA : Obituary of the Late Mr. Genji MARUO

丸尾源治先生（1921～1986）の訃報を知ったのは10月人間ドックで，偶然同室になった方からであった。7月先生からの便りで，公立鶴来総合病院に入院しているがそろそろ退院できます。安心して下さいと記してあった。忙しさに紛れて失念していたので思わず声をあげた。

丸尾先生は，石川県石川郡尾口村に生を受け，昭和20年9月東京農業教育専門学校(後の東京教育大学農学部）を卒業され，郷里で小学校や中学校の教壇に立たれた。昭和52年以後昭和58年3月退職されるまで，石川県派遣社会教育主事として社会教育に献身的に活躍された。

小中学校に在任中は，児童や生徒の理科教育の指導に情熱を注がれ，「中高教育への発展を考えた小学校理科教育における生物教材の考察」と題して，昭和43年度以降改訂の学習指導要領理科編生物の総合的な考察と共に，尾添川流域や桑島周辺の植物を，小学校の生物教材としてとりあげるために実証的な研究を進められた。

また手取川に手取ダム（ロックフィルダム）が建設されるのを機会に，ダム埋没以前の手取川の上流旧牛首川と尾添川周辺の植物目録を作成するなど幅広く活躍された。

退職後は，白山ろく一里野高原の丸尾ビレージの経営と共に金沢市内の学童たちに，さつまいもの栽培や掘りとり等自然に親しむ勤労体験の場を提供されたりした。

白山ろくの植物を愛され，理科教育に情熱を注がれた丸尾源治先生のご冥福を心からお祈りいたします。

○ 池上義信（監修）・石沢　進（編集）　**新潟県植物分布図集**　第7集　コーエイ印刷株式会社（〒950　新潟市弁天橋通1-31-30），昭和61年12月25日発行。A4版，436頁＋図版14頁。定価6,000円（送料別）。

第6集（本誌34巻1号に紹介）と同様100種につき，水平分布図・垂直分布図ならびに引用した標本産地が記されている。なお，県単位の植物図集では，最近（昭和62年3月），神奈川県のものが出た。（里見信生）

正　　誤

Vol.XXXIV. No. 2, p. 69, 右，上から17行目　Caulis bulbiferi→Caules bulbiferi

植物地理・分類研究会第6回大会（寺下友三郎）

第6回大会は石川県珠洲市折戸町の〝能登きのうら荘〟で，下記の日程のもとに開催された。

昭和61年8月2日(土)，午後2時開会，直ちに講演が開始され，中西弘樹氏の〝日本海の漂着種子と分布〟と鈴木三男氏の〝ネパール・ヒマラヤの植生と植物〟の二題を拝聴した。午後6時より総会にうつり，本会代表里見信生氏が会務報告を行ない，承認の上，続いて懇親会に入ったが，日本海の新鮮な魚介類の料理を前にしては，おのづから盃の数が重なり，時の経つのも忘れるほどであった。

翌8月3日（日）はイクスカーションで，午前8時30分宿舎発，木の浦遊歩道を経て千本椿を視察の上，能登半島の最先端に向い，山伏山の自然林と須々神社社叢林（国指定天然記念物）を見学の上，午後1時30分，次回大会での再会を期しつつ，名残を惜しみ開散した。

日本海に，長く突き出た能登半島の，しかも先端という交通不便な地で開催された大会であり，十分な御世話が出来ず，幹事としては真に申しわけなく存じましたが，幸にして天気に恵まれ，美しい日本海の青と山々の緑を，いつまでも思い出して下さいますならば，望外の幸と思って居ります。

植物地理・分類研究（北陸の植物）索引の刊行と贈呈

本誌の索引，第1巻（1952）～第33巻（1985）が刊行されました。定価は2,000円です。和名・学名・著者名索引の3部からなり，〝植物地理・分類研究（北陸の植物）〟の御利用に御役に立つと存じます。是非御求め下さいますよう御願い申上げます。

なお，昭和27年(創刊年度)に御入会下さいまして，その後現在まで引続き永年会員の方々には，本誌35巻を記念し，贈呈申上ることに致しました。それらの方々と御入会月日は下記の通りです（敬称は省略させていただきます。御了承下さい)。

1月28日	寺下友三郎	3月10日	池上　義信	7月20日	神谷　平	7月30日	本多　啓七
2月3日	細井幸兵衛	3月13日	岩野　俊逸	7月22日	沼田　真	9月4日	須賀　瑛文
2月4日	大村　敏朗	4月30日	伊藤　至	7月23日	代崎　良丸	10月31日	森　邦彦
2月8日	山岡　正尾	5月31日	難波　早苗	7月28日	太田　弘	11月7日	斉藤　寛昭
3月9日	島田　郁雄	7月15日	尾崎　富衛	7月30日	小路　登一	11月12日	浜谷　稔夫

植物地理・分類研究会第7回大会について

本年度開催すべき第7回大会は，休止させていただくことと致しました。参加を予定して下さった方々には真に申訳ございませんが，これに要する経費を兼て申上げました35巻2号（記念号）の印刷費に加えさせていただきたいという理由によるもので，御了承下さいますよう御願い申し上げます。

編　集　後　記

今号には余白があまり出ませんでしたことから，新刊紹介が少なくなってしまいました。次号では可能な限り多数の新刊を紹介申上たいと思って居ります。

○　豊岡秀夫編　**植物学ラテン語辞典**　至文堂，昭和62年5月10日発行。A5版，386頁。定価9,000円。

新しく学名を発表するには〝国際命名規約〟により，ラテン語の記載文を伴わないと有効な発表とならない。したがって，植物を学ぶために，ラテン語についての解説書が要望されていたが，従来，適当なものが出版されていない。著者は，この必要性から本書を企画された。書名から御察しの通り，大半がラ一和辞典と和一ラ辞典ですが，337頁以降は文法部で，著者は植物の正確な記載文を書くために精読されることを，お望みと推察する。

○　正宗厳敬　**日本の自生蘭　写真と図**　第3集　自己出版。昭和62年3月1日発行。A4版，51頁。7,000円。

第2集(昭和61年7月発行)につづいて，第3集が出版された。本集ではオキナワチドリ，ハクサンチドリ，ウチョウラン，カモメラン，ナゴラン，ヒメホテイラン，ホテイラン，ヤクシマヒメアリドウシラン，クモキリソウ，ジガバチソウ，キエビネ，トキソウ，コラン，イチョウラン，ナリヤランの15種が前集と同様，カラー写真と線画で編集されている。御注文は正宗先生宛（〒250 小田原市入生田423，振替口座横浜16040)。(里見信生)